



仏生寺の 先賢

齋藤
弥九郎

南弘





幕末の剣豪 齋藤弥九郎

西曆	和曆	出来事
一七九八	寛政十	一月十日、仏生寺村組合頭新助の長男として誕生
一八一	文化八	八歳の頃に御田神社で、十歳の頃に光久寺で学んだとされる
一八一三	文化十	十三歳の時、高岡の油屋や薬種商へ奉公に出る
一八二六	文政九	十五歳で江戸へ出て、郷土出身の土屋清五郎を頼る
一八三七	天保八	旗本能勢家に住み込みで働き、日夜仕事や勉強に励む
一八三九	天保十	神道無念流岡田十松の撃剣館に入門する
		二十九歳で俎板橋付近に道場練兵館を設立する
		撃剣館同門江川英龍が葦山代官に就任し側近に登用される
		大塩平八郎の乱が発生し江川の命で状況把握のため大阪へ向かう
		江戸湾警備の強化のため江川に従い海岸測量に出る



富山県初の大内 南弘

西曆	和曆	出来事
一八九四	明治二七	高岡の南兵吉の養子となり南弘と名乗る
一八九六	明治二九	この年卒業し、文官高等試験に合格して内閣属となる
一八九八	明治三一	内閣書記官に就任する
一九〇八	明治四一	第一次西園寺公望内閣の内閣書記官長に就任（在任七か月）
一九一一	明治四四	第二次西園寺公望内閣の内閣書記官長に就任（在任一年四か月）
一九一二	明治四五	明治天皇崩御され大葬の礼を事務方責任者として取り仕切る
	・大正元	
一八九六	明治二九	この年卒業し、文官高等試験に合格して内閣属となる
一八九八	明治三一	内閣書記官に就任する
一九〇八	明治四一	第一次西園寺公望内閣の内閣書記官長に就任（在任七か月）
一九一一	明治四四	第二次西園寺公望内閣の内閣書記官長に就任（在任一年四か月）
一九一二	明治四五	明治天皇崩御され大葬の礼を事務方責任者として取り仕切る
	・大正元	

一八四一	天保十二	高島秋帆の西洋砲術演習に大砲方として参加
一八四七	弘化四	水戸の弘道館の開館式に徳川斉昭公から招待される
一八四九	嘉永二	長男新太郎らが剣術修行のため全国を回り始める
一八五一	嘉永四	新太郎ら萩に二か月留まり剣術を指南する
一八五二	嘉永五	吉田松陰、江戸に出て弥九郎・新太郎に会う
一八五三	嘉永六	新太郎、萩に再度向かい、帰りに桂小五郎を伴う
一八五五	安政二	ペリー来航。台場築造の現場監督を江川から依頼される
一八六八	明治元	この頃道場経営と弥九郎の名を新太郎に譲り篤信齋となる
一八六九	明治二	桂の依頼により新政府の役人となり会計官に勤める
一八七一	明治四	大阪の造幣寮が火災、重要書類を持出すために大火傷
一九〇七	明治四十	十月二十四日、七十三年の生涯を閉じる 従四位の位記が贈られる

一九一三	大正二	貴族院議員の勅撰議員に任じられる
一九一八	大正七	福岡県知事に任じられる（在任約一年）
一九三二	昭和七	文部次官に任命される（在任約四年）
一九三三	昭和八	三月、第十五代台湾総督に任じられる（在任二か月）
一九三四	昭和九	五・一五事件後の齋藤実内閣で通信大臣に任命され、富山県初の大任となる（在任二年二か月）
一九三六	昭和十一	国語審議会の会長に就任（在任約十年）
一九三七	昭和十二	枢密顧問官に任命される
一九四六	昭和二十	枢密院で審議された新しい省の名称に「厚生省」を提案し採用
		二月八日、食糧緊急措置令審査委員会の会長として会議出席中倒れ死去。七十八年の生涯を閉じる

幕末の剣豪

齋藤弥九郎

一七九八年（寛政十年）

（一八七一年（明治四年）



齋藤弥九郎先生は、一七九八（寛政十）

年、射水郡仏生寺村（仏生寺・脇之谷内）の農民新助の長男として生まれましました。後に、江戸へ出て剣術を修め、練兵館の道場主

として多くの弟子を育てました。弥九郎は、千葉周作（北辰一刀流・玄武館）、桃井春蔵（鏡新明智流・士学館）と並んで三大剣豪といわれています。

練兵館の門下生は、三千人を越えるといわれており、その中には、桂小五郎（後の木戸孝允）や高杉晋作、品川弥二郎、渡辺昇などがおりました。また、藤田東湖や、渡辺崋山、高野長英、吉田松陰など、幕末を代表する思想家との交流がありました。

齋藤弥九郎の一生について、足跡を紹介します。

江戸へ出て、げきけんかん 撃剣館に入門

弥九郎は、幼いころから、辛抱強く勉強に励みました。八歳のころには御田神社みたじんじや（仏生寺・寺中）で、十歳のころには、光久寺こうきゅうじ（飯久保）で勉強しました。

一八一一（江戸・文化八）年、十三歳となった弥九郎は高岡の油屋、葉種商に奉公に入りました。そこで、加賀藩の参勤交代さんきんこうたいの行列を目の当たりにし、武士を強く志すようになりました。さらに、行商人から江戸の繁栄を聞き、立身を遂げたいという思いを強くし、十五歳で、単身江戸に出ました。

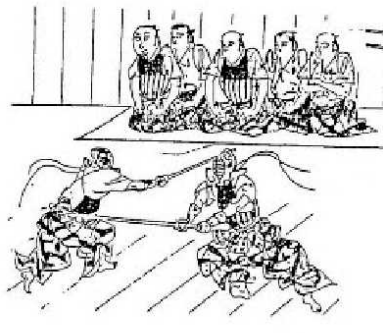
江戸では、郷土出身の土屋清五郎つちやせいごろうを頼ってしばらく滞在した後、旗本の能勢家のせけに住み込みをして懸命に働き、夜は読書に励みました。寒い

幕末の剣豪 斎藤 弥九郎

現在の御田神社



夜には竹刀を振って体を温め、再び机に向かったといいます。日中家事に精励し、夜間文武に励む姿が認められ、神道無念流しんどうむねんりゅう 岡田十松おかだじゅうまつの



剣術道場で稽古に励む剣士たち

「撃劍館」の門に入ることになりました。弥九郎は、熱心に劍の修行にいそしみ、その技量を上達させて、十松に代わって指南するまでになりました。そのかたわら、漢学、兵法、馬術、西洋砲術などの勉強を修めました。

水戸藩士藤田東湖、三州田原藩士渡辺崋山、伊豆代官江川英龍らは、「撃劍館」での相弟子であり、その後の弥九郎の人生にとって大きな影響を与えることとなります。

二十九歳で自分の道場を開く

岡田十松の死後、「撃劍館」の師範代に推されて、道場をもち立てた後、二十九歳のとき、江戸飯田町俎板橋付近に道場「練兵館」を開きました。

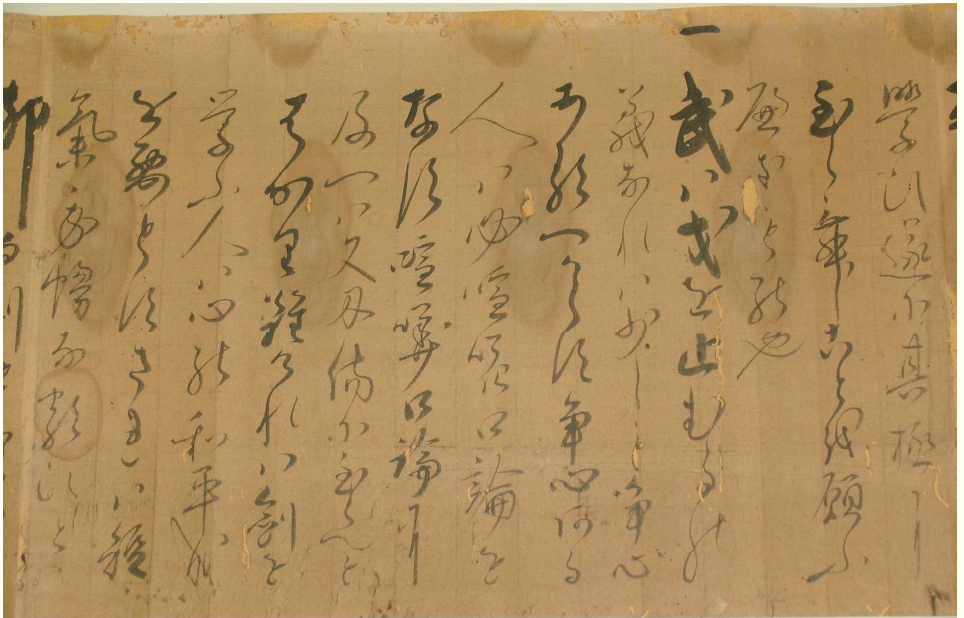
練兵館は、文武両道を重んじ、弥九郎自身が兵学を講じることや、毎日の日課に素読を取り入れるなど、学問を極めて重視しました。この徹底した人格教育が優れた人材を世に送り出す要因になったといえるでしょう。

その道場に掲示された「神道無念流演劍場壁書」には、「武は戈を止むるの義なれば、少しも争心あるべからず。：劍を学ぶ人は、心の和平なるを要とす。」「兵は凶器といえは、その身一生用いることのなきは、大幸というべし。」など、劍はただ心身鍛練の一助であると六か条にわたり説かれています。弥九郎はこうした壁書の精神を最もよく体得して、一生、刀を交えることがなかったと伝えられています。弥九郎が、「不拔の劍豪」と言われるゆえんです。

葦山代官の側近に任用

弥九郎は、三十代前半、道場経営に全力を注ぎました。その状況が江川英龍えがわひでたつの父英毅ひでたけの死により一変します。一八三五（江戸・天保六）年、父が務めていた葦山代官あしやまだいかんの職を継いだ江川が、弥九郎を自分の側近として登用したのです。葦山代官は、東国にある幕府直轄ちよつかつてんりきょうの天領を監督するために設置された役所で、江川家は代々その職にありました。父の英毅時代は、相模、伊豆、甲斐、武蔵むさしにある天領のうち、七万二千石余を支配していました。代官は、直轄領の年貢の徴収、紛争処理、治安維持や罪人の処罰、村方への貸付金の運用など、様々な業務を行っています。弥九郎は、江川家において江戸詰えどづめの書役かきやくという役職に任じられ、これらの業務に

幕末の剣豪 齋藤 弥九郎



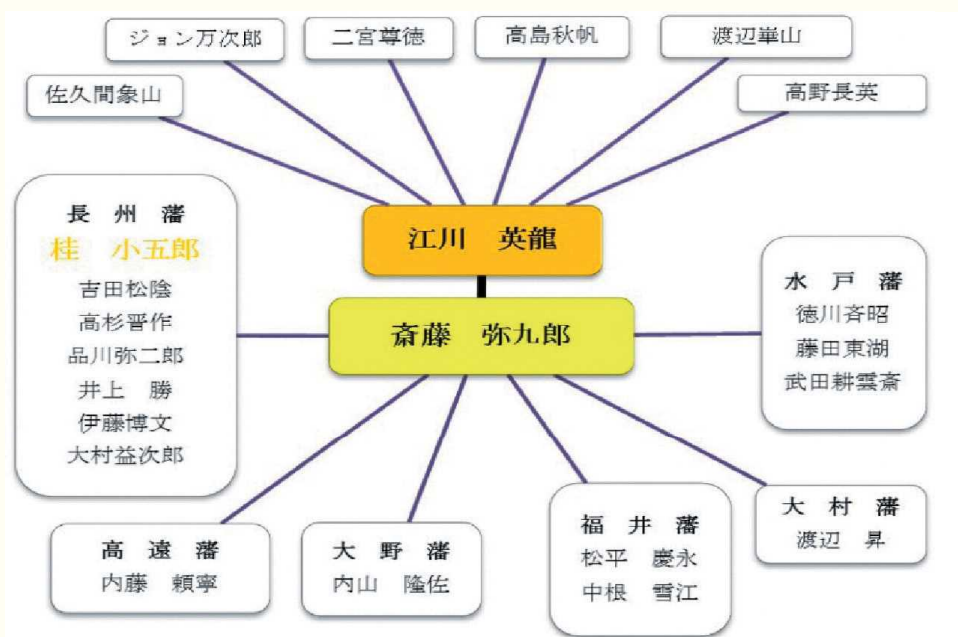
神道無念流演劍場壁書（一部）

携わりました。

しかし、弥九郎が最も期待されたのは、道場主としての人脉とそれに伴う情報収集力の高さでした。幕末、窮地に立たされた幕府が頼りとした江川家において、要人との交渉役、おんみつり 隠密裡に運ぶためのちようほうやく 謀報役など主に裏方の重要な役割を担い、見事期待に応えました。

水戸藩・長州藩とのつながり

弥九郎は、にらやまだいかん 葦山代官の側近として活動した大塩平八郎の乱に関する大阪の状況を撃剣館の同門であった水戸藩士藤田東湖に報告しました。藤田東湖は、その詳細なメモを「浪速騒擾記事」として、水戸藩九代藩主徳川斉昭に示しました。また、五十歳となった弥九郎は、二十歳に成



斎藤弥九郎と江川英龍との交友関係

長した長男新太郎を全国修行に向かわせ、約二ヶ月間滞在した長州藩では、藩士らは、新

太郎の剣に全く歯が立たず、剣術の指南を要請されました。その後、新太郎が江戸に戻つ

た後、江戸藩邸にいる長州藩士の多くが練兵館に入門しました。兵学を修めるために江戸

に出てきた吉田松陰も弥九郎、新太郎に對面し、長州藩士らとのつながりが強まりました。

一八五三（江戸・嘉永六）年には、桂小五郎（後の木戸孝允）も入門しました。



桂小五郎

こうした見識

が認められて、

徳川斉昭（水戸藩主）、毛利元徳

（長州藩主）、

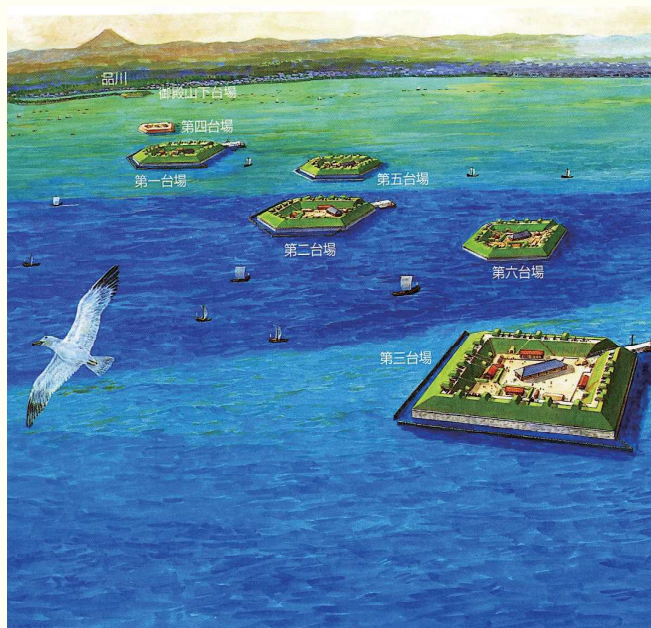
松平春嶽（福

松平春嶽（福

井藩主）らの厚遇を受け、折に触れて時勢を論じるなど高い評価を受けました。

ペリー来航、台場築造

一八五三（江戸・嘉永六）年六月、黒船四隻が浦賀に來航しました。ペリー提督は、アメリカ大統領フィルモアの国書を受け取るよう幕府に迫りました。上陸後、貿易や遭難者の保護などを内容とする国書を幕府側に手渡すと、ペリーから、來春、再来航するので回答を用意しておくよう求められ、黒船を江戸湾内に侵入させるデモンストレーションを演じ、出航しました。幕府は、急きよ対応する必要に迫られました。そこで登用されたのが葦山代官江川英龍でした。江川は、江戸湾内の台場築造にあたり、



斎藤弥九郎が現場監督した台場

弥九郎に同行を求めました。検討の結果、江戸湾内の品川沖しながわおきに十二基の台場を一定の間隔で築造することになり、江川がその設計を担当ちくぞうしました。弥九郎が台場築造の現場監督を行いました、その弁当持ちとして桂小五郎が同行してい



江戸時代に作られた台場の内現存する第6台場

たといわれています。弥九郎は、同時期、台場に設置するため、湯島の大砲鑄造所の大砲鑄造御用掛にも任じられており、ペリー来航以降、多忙を極めた江川の仕事を側面から支えていたといわれています。

新政府の役人に就任

一八五五（江戸・安政二）年、弥九郎の名と道場の経営を長男新太郎に譲り、隠居して篤信齋と名乗りました。

その後、尊皇攘夷派の弾圧「安政の大獄」が始まると、水戸藩とのつながりが深い篤信齋は、絶えず監視を受けるようになりました。一五代将軍徳川慶喜が大政を朝廷に返還（大政奉還）したところ、隠居の身となった弥九郎こと篤信齋

は、六十歳を超え、茶園を開いたり、藩士に剣の指導をしたり、釣りをしたりして楽しんでいました。

しかし、乱世はそんな篤信齋をそつとしておきませんでした。

一八六八（江戸・慶応四）年、戊辰戦争で新政府が勝ち、江戸城も無血開城となって江戸時代が終わりました。

桂小五郎から依頼を受けたと考えられますが、一八六八（明治元）年八月、篤信齋は新政



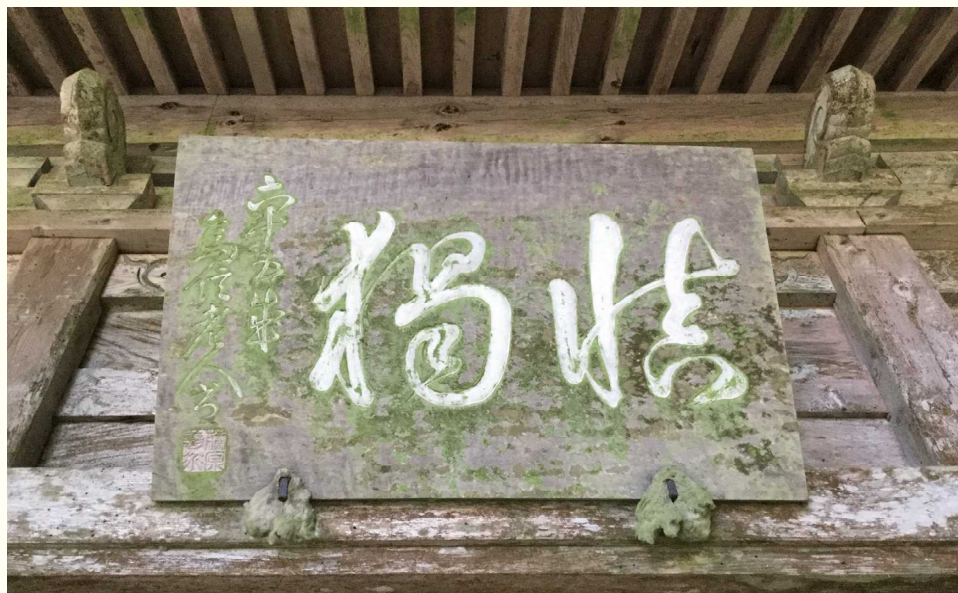
高遠藩から贈られた
齋藤篤信齋 62 歳の肖像画

府の役人に就任しました。七十歳を超えた高齢でありながら、かいけいかんごんはんじ会計官権判事、ぞうへいごんじょう造幣権允、くわんざん鉦山大佑などに相次いで任じられました。一貫して貨幣製造のための鉦山開発に携わり大阪に在住しました。

七十三歳の生涯

在任中、造幣局で火災が発生したため、火の中に飛び込み重要書類を運び出しましたが、大火傷を負ってしまいました。そのやけども一因となり、明治四年十月、七十三歳の生涯を閉じました。

桂小五郎の日記には、篤信齋死去の翌日、「齋藤篤信齋昨日死去のことを承知せり、実に余の恩人七十有余不治の病を知るといえどもふかん俯瞰



諏訪神社に掲げられている弥九郎（65歳）の書「慎独」
「たとえ独りであるときも、常に慎み深く、慎重に事を成すこと」の意



東京・代々木の福泉寺にある
「贈従四位 篤信齋 斎藤先生之墓」

「愁傷なり」と書きつづられており、その悲しみの深さが伝わってきます。

いったんはのんびりと余生を過ごすかのよう
にみえましたが、死ぬ直前まで、まるで老体に

鞭打つように働いた篤信齋でした。

現在、篤信齋の墓地は東京・代々木福泉寺にあり、家族らと共に眠っています。墓石には、没後三十六年が経過した一九〇七（明治四十）年に贈られた従四位の位記が彫られています。



脇之谷内諏訪社にある
「勤王志士贈従四位斎藤篤信齋翁之碑」
（明治 41 年 4 月建立）

仏生寺が生んだ幕末の先賢

幕末から近代へと向かう時代の大きな転換期において、剣豪に求められたものは、それまでの「剣の達人」という戦士としての能力だけでなく、剣により到達した境地をもって国づくりをする政治家としての先見の明や行動力、あるいは、教育者としての人づくりの能力でした。

齋藤弥九郎先生の魅力は、剣の技量を述べるだけでは足りません。幕末という時代に関わり、共に生きた志士たちに与えた影響の大きさは計り知れません。篤信齋こと、齋藤弥九郎は、激動の時代を生き抜いた深い学問と豊かな心を持ちあわせた戦士であったと言えるでしょう。



脇之谷内集落総合センター前にある「剣聖齋藤弥九郎先生生誕之地」碑
(昭和60年9月建立)



十三中学校にある「斎藤弥九郎篤信齋」銅像
(昭和36年11月建立)

氷見市内には、弥九郎を先賢せんけんと称え、その業績を顕彰するため銅像が三基（十三中学校、朝日山公園、脇之谷内集落総合センター）に建立こんりゅうされています。



脇之谷内集落総合センター前にある
「斎藤篤信齋翁」銅像
(平成16年10月建立)



朝日山公園にある
「篤信齋 斎藤弥九郎先生」銅像
(昭和44年秋建立)

富山県初の大臣

南弘

一八六九年（明治二年）
一九四六年（昭和二十二年）



兄の岩間菊太郎
（後の一平）

の二平）、尚剛
（甥・後の覚
平）の三代に
わたり県議会
議員や仏生寺

村長を務めるほどの名家で、広大な屋敷地や山林を所有していました。

生家の近くに御田神社（みたじんじや 仏生寺・寺中）があり、幼少時よりその宮司平井正承の（まひつぐ 教えを受け

南弘先生は、明治二年（一八六九）仏生寺・寺中の豪農岩間覚平の次男として生まれ、幼名を鉄郎といたしました。

岩間家は、岩間覚平（父）、菊太郎（兄・後

在の富山高校）、第四高等学校（現在の金沢大学）に進み、東京帝国大学法科大学政治学科で学んでいた明治二十七年に高岡の旧家出身で第二代

富山県会議長を務めた南兵吉の養子となり、その長女・操みさおと結婚した際、「南弘」と改名しています。

弘の義理の母節子は、タカジアスターゼとアドレナリンという二つの薬を発明した化学者、高峰譲吉たかみねじょうきち博士の妹にあたり、高岡市長を二期務めた南慎一郎は義弟にあたります。

明治二十九年、東京帝国大学を卒業し、難関の文官高等試験に合格して国の官僚となりました。

初め、内閣書記官室庶務課の事務職員となり、二年後には昇進して内閣書記官となって、国の中枢の仕事をおよそ十年に渡って担いました。

このころの内閣総理大臣は、大隈重信おおくましげのぶ、山縣有朋やまがたありとも、伊藤博文いとうひろぶみ、桂太郎かつらたろうと続き、南はそれらの内閣を書記官として支えたのです。

内閣書記官長として

桂太郎の次の内閣総理大臣に西園寺公望さいおんじきんもちが就任し、明治四十一年一月には、南を内閣事務方のトップである内閣書記官長に任命しました。これは現在の内閣官房長官にあたる役職とされ、西園寺内閣の要となったのです。

西園寺内閣が同年七月に退陣すると同時に南も退きますが、明治四十四年に第二次西園寺内閣が誕生すると、南は再び書記官長に任命され、



西園寺公望

約一年半その職を務めました。

その間に、明治四十五年七月三十日に

明治天皇が崩御され、同年（大正元年）九月に執り行われた大葬の儀を事務方の責任者として取り仕切りました。

西園寺公は退任後「元老」という、首相交代時に天皇に進言する役目で政界に大きく影響を及ぼす存在となりますが、南は、生涯西園寺公とのつながりが続き、年末になると毎年のように氷見の鰯を贈っていたと言われています。

また、内閣書記官長在任中の明治四十五年三月十七日付で発信された、仏生寺尋常小学校の中野良吉校長宛の手紙が残されています。その内容は、「朝鮮忠清南道ちゆうせいなんどうの城跡で発掘調査が行われた際に出土した約千二百年前の焼米を寄贈するので、教材として活用してもらいたい」とするものです。

当時の朝鮮半島は、明治四十三年（一九一〇）

に韓国併合条約が締結され、

日本の植民地

統治が行われ

ていました。

南がこの焼米

をなぜ入手し

たのかなど詳

細は不明です

が、母校の子

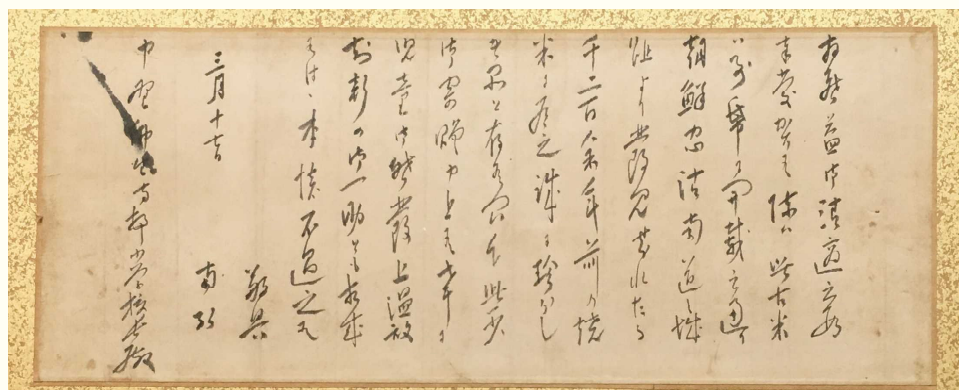
弟の教育に強

い思い入れを

もって、寄贈

したものと考

えられます。



仏生寺小 中野校長に宛てた南の書簡

貴族院議員や文部次官として

大正元年十二月には、貴族院議員となります。

貴族院は、大日本帝国憲法下における帝国議会の上院であり、第二次大戦後は参議院へと継承されていったものです。議員は、成年皇族や華族から選ばれた者の他、三十歳以上の国家功労者または学識者の中から特に天皇に選ばれた者（勅選議員^{ちよくせん}）等からなり、南は終身任期である勅選議員となりました。（実際には枢密顧問官^{すうみつこもんかん}となつた昭和十二年十二月まで）

その後、大正二年には福岡県知事を約一年務めました。そして大正七年には「平民宰相」と呼ばれた原敬^{はらたかし}首相時代の文部次官に就任します。石川県出身の中橋徳五郎^{なかはしとくごろう}文部大臣とのコンビで次の高橋是清^{たかはしこれきよ}内閣でも大臣と次官を務め、

約四年間文部行政を率いました。

この時の大きな課題が全国に高等教育機関を拡充することでしたが、多額の予算を投じて行うこの事業を中橋大臣と乗り切りました。現在全国にある国立大学の多くがこの時の拡充を機にできた高等学校等が前身となっています。現在の富山大学経済学部の前身である高岡高等商業学校は、全国からの誘致合戦の中で、南文部次官の後押しもあって、高岡に設立できたと言われています。

国語問題に関わる

文部次官中に携わったもう一つの大きなことは、国語問題です。

明治以前の我が国の言葉は、漢字が多いこと、

昭和七年、逓信大臣に就任

昭和七年（一九三二）三月、南は台湾総督に任命されました。

当時台湾は日本の統治下にあり、台北に総督府がおかれて、有力な政治家や軍人などが総督に就任しており、南は十五代目の総督になりました。

しかし、南の総督就任期間は二か月というとても短いものでした。この年の五月十五日、犬養毅首相が軍の青年将校などによって暗殺されるといふ大事件が発生しました（五・一五事件）。そのあとを受けて組閣された斎藤実内閣において逓信大臣に任じられました。これは富山県出身者としては初の大蔵となります。

逓信省とは、通信、海運、郵便、電気、航空

かな遣いが不規則であること、文体が口語体、文語体などと多様であることなど、教育上、または生活上困難なことから、「漢字をすべて廃止してかな文字やローマ字だけにしよう」とする考えも生まれていました。

こうした中、南は文部次官として、臨時国語調査会を発足させました。その調査会では、「常用漢字表（一九六二字）」などが示されました。その後改定が何度もあり、現在の「常用漢字表」につながっています。

時を経て、昭和九年に国語審議会が発足した際には、会長に就任し、昭和二十一年に亡くなるまで一貫して会長として、我が国の国語の改善に尽力しています。

おらが國の初大臣

逓信の南弘さん

綱を若葉が重なつた様な目出度さ

郷土にあげて歡喜

逓信大臣南弘さん(右)が、先任逓信大臣の佐々木謙吉さん(左)から、逓信大臣の任を譲られ、今日、逓信大臣に就任された。南弘さんは、今日、逓信大臣に就任された。南弘さんは、今日、逓信大臣に就任された。南弘さんは、今日、逓信大臣に就任された。

隣の緒を切つた佛生寺に

早くから大志を抱く

草深い山の靈氣に生きて

佛生寺(富山県南砺市)の山に、南弘さんの幼少時代は、草深い山の靈氣に生きて、早くから大志を抱く。南弘さんは、今日、逓信大臣に就任された。南弘さんは、今日、逓信大臣に就任された。

大臣の横顔を語る

英語演説がー

滅法うまかつた

南さんの書生してゐた 蓮王寺住職語る



若き日の南氏 昭和十一年七月

石橋を叩いて渡る

用心深い性格

弘さんとは義弟關係の 南 弘 一郎さん語る

南弘さんは、今日、逓信大臣に就任された。南弘さんは、今日、逓信大臣に就任された。南弘さんは、今日、逓信大臣に就任された。南弘さんは、今日、逓信大臣に就任された。

逓信大臣に就任したときの新聞記事

などを所管する役所で、南は、二年二か月にわたり大臣を務めました。その間、省の職員らのための通信病院の設立や、通信事業特別会計の創設など懸案事業の対応に尽力しました。

就任直後の同年七月、富山県に帰郷した際、母校である仏生寺小学校で祝賀会が開かれました。南は、そのときの感動を次のように書き残

しています。

「村人は余が母校である小学校に集って祝賀会を開いてくれた。此会ほど余が嬉しく感じたものは他に多くはない。(中略)集った村人の中に小学校時代の同級生がたった一人雑まじって



仏生寺小学校で開かれた祝賀会で話す南

居た。互いに手を握ったまま少時しょうじ言葉も出なかった。」

枢密顧問官に就任

昭和十一年(一九三六)には枢密顧問官に任じられました。

枢密顧問官とは、大日本帝国憲法下における

富山県初の大員 南弘

天皇の最高諮問機関である「枢密院」の委員のことで、四十歳以上の「元勳練達の者」（特別な功績があるか、長年の学識経験がある者）から選出されることになっており、有力な政治家や元官僚から選ばれました。

昭和十二年、内務省から保健・衛生部門等を独立させた新たな省が設立され、その省の名前を検討していた際、「保健社会省」という名が候補に挙がったものの、「省名が長い」「社会主義を連想させる」といった意見が多くまとまりませんでした。

枢密院でこのことが議題となったとき、中国の歴史書などに詳しくかった南は、中国の古典である『書経』の中の一節「正徳利用、厚生惟和（徳を正しうして用を利し、生を厚うしてこれを和し）」を語源にして「厚生省としてはどう

だろうか」と提案し、最終的に採用されました。このため、「厚生省の名付け親」とも呼ばれています。（同省は翌年発足）。

また、徐々に軍部の力が強まる時代の中にあつて、枢密院の議論において正論を述べ、いわゆる軍国主義に対して批判的な発言をしたため、軍部にけむたがれたといわれています。

昭和二十年、日本が敗戦した後も枢密顧問

枢密顧問官に就任したときの新聞記事

官を務めていたが、昭和二十一年二月八日、会議中に炭火による一

酸化炭素中毒で亡くなりました。

七十八年の人生すべてを日本という国と国民のために働き続けた南弘先生。生家である岩間家、そして養子となった南家の両家とその檀家である高岡市太田の国泰寺の墓地に、妻、操と共に静かに眠っています。

南弘先生とふるさと氷見

南弘先生は、齋藤弥九郎先生と同じ仏生寺村出身であり、岩間家と齋藤家とは親交もあったことから、郷土の先賢として尊敬し、大正七年に『幕末偉人齋藤弥九郎伝』（大坪武門著）が出版されたときには、その序文を寄せています。また、市内十一社の神社の社標に南弘先生の筆跡が残されています。これらを建立された順

南弘先生が揮毫した社標

建立年	地区名	神社名	記された役職名
明治 45	大浦	日宮神社	内閣書記官長従四位
大正 5	伊勢大町	伊勢玉神社	貴族院議員従四位勲二等
大正 8	仏生寺（寺中）	御田神社	文部次官従四位勲二等
大正 9	惣領	天満宮	文部次官従四位勲二等
大正 10	鞍骨	高野土田神社	従四位勲二等
大正 11	三尾	熊野社	正四位勲二等文部次官
昭和 5	比美町（浜町）	魚取社	貴族院議員正四位勲二等
昭和 6	仏生寺（細越）	少名彦社	正四位勲二等貴族院議員
昭和 9	磯辺	磯部神社	逓信大臣従三位勲一等
昭和 15	久目	久目神社	枢密顧問官正三位勲一等
昭和 15	柳田	柳田神社	枢密顧問官従二位勲一等

番に並べてみると、様々な役職を歴任して出世していく様子を知ることができます。



旧仏生寺小学校下の忠魂碑前にある

「斎藤弥九郎・南弘両先生生誕之地」碑

揮毫：堀埜豊一（建立時の氷見市長）

仏生寺の先賢 斎藤弥九郎・南弘

令和元年十月 発行

編集・発行 仏生寺地域づくり協議会

富山県氷見市惣領二〇一〇

編集委員長

屋敷 宗一（地域づくり協議会会長）

同 委員

根山 仁志（地域づくり協議会副会長）

同 委員

松下 正市（地域づくり協議会副会長）

同 委員

片田 義治（地域づくり協議会理事）

同 委員

河原 悦郎（地域づくり協議会監事）

同 委員

西尾 忠雄（地域づくり協議会事務局長）

編集担当

斎藤弥九郎

光安 淳子（氷見市立十三中学校校長）

南 弘

小谷 超（氷見市教育委員会課長補佐）

編集協力

坂下 恵（氷見市立十三中学校教諭）

同

高木 衛（仏生寺地区担当市職員）